

# 二十五年ぶりの教育実習

——イギリス公立幼稚園保育参加顛末(2)——

豊田 一秀

私は一九九七年九月より、イギリスの公立幼稚園 (State Nursery School) で保育に参加する機会を得た (イギリスでは幼稚園 = Kindergarten という言葉は一般的には使われずに、ナースリースクールという言葉を使っているが、実質的に日本の幼稚園に近いことからここでは幼稚園と訳す事にした)。保育に参加するに際して私がかがけた事は、当然

ながら子どもや先生たちと良い関係を創るという事である。とりわけ先生たちとの信頼関係はこの参加観察を持続させるためにも不可欠である。先生たちと意思の疎通を密にして先生たちに安心され信頼される事が第一である。意思の疎通とは、私が先生たちの気持ちや意図に対して敏になる事と同時に、私の考えや気持ちをきちっと先方に伝える事でもあ

る。具体的に何が先生たちを安心させるかは先生たちの個性もさる事ながら、文化的な違いや言語的な制約もあってすぐに私に把握できる事ではない。試行錯誤の中からイギリスの先生たちとの関係を育てる事それ自体に私が学びうる要素が隠されていると思う。

私は「参加」という言葉を使ったが、この言葉について少し説明する必要があるように思う。

参加するとはその場に関与する事であるから、そこには相互的な関係性が生まれる。参加者は保育の場に影響を与えると同時に、自身もその場に影響される存在である。参加者は見る人であると同時に見られる人であり、助ける人であると同時に助けられる人であり、さらに教える人であると同時に教えられる人でもあるのである。私がこの文章の表題に「教育実習」という言葉を使ったのも、自分が観察者以上の「その場全体の渦に巻き込まれながら教え

られる」存在でありたいと願ったからである。

この幼稚園にはブルークラス、レッドクラス、イエロークラスと三つのクラスがある。それらはみな同じ年齢の子どもで構成されている。前回にも述べたが、イギリスの義務教育は五歳から始まる事、小学校の中にレセプションクラスというクラスを作って四歳児を、時には三歳児も受け入れる方策を政府が進めている事等から、幼稚園には三歳児を中心に三、四歳児しかいない結果となっている。この事実がイギリスの幼稚園をマイナーなものにしていると私は考えるのだが、ここでは詳しくは触れないでおこう。

私はしばらくブルークラスに参加することになった。担任の先生はK先生とG先生。K先生は三十年代後半の女性で二人の子どもがいる。下の男の子、ルイはブルークラスで保育されている。母親のクラスで過ごすというのは、親子どちらにとってもなか

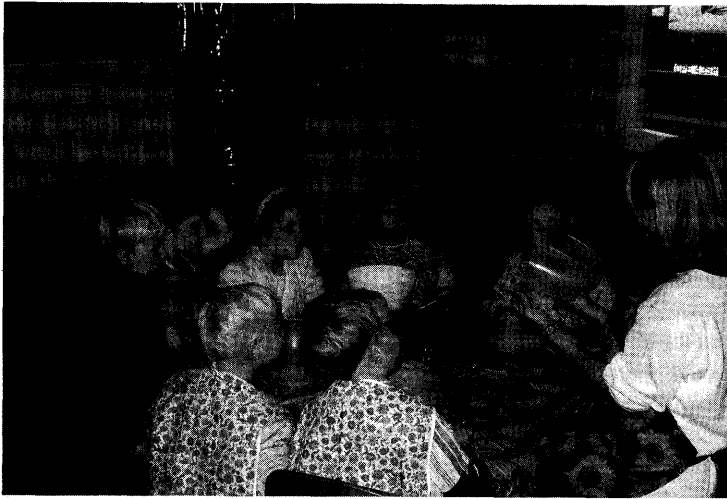
なか大変な面があるようである。G先生は五十代後半の女性で、もう成人した三人の娘さんがいる。

資格的には、K先生はティーチャー（教諭）、G先生はナースリーナース（保母）である。教諭の資格は大学レベル（イギリスの大学は通常三年であるが、教員資格は最近四年間かかるようである）で取れ、ナースは専門学校（二年間）で取得出来る。職場での役割が異なる他、給与の面でも三十パーセント程教諭の方が良いそうである。イギリスの資格社会の一面を見る思いである。この国ではこのように異なった資格を持った教師が、ペアーを組む場合が多い。ブルークラスにはこの他に二人の非常勤の先生（共に資格はナースリーナース）が、援助を必要とする二人の子どものために入っていて、一クラス二十四人の子どもに四人の先生という陣容である。

さて、その日、先生のクラス全体への言葉かけは、九時二十分に出欠をとる事から始まった。九時



▲保育が始まる前のクラス。各机にその日の活動がセットされている



▲ケーキ作りコーナーの子どもたちの真剣な顔

に登園した子どもは二十分程車座になってカーベットの  
トの上で待っているわけである。絵本を出したり友  
達と軽くふざけたりしている。出欠を取り終わると  
先生はテーブルに用意されたいくつかの活動につい  
て説明する。その日に先生が用意した活動コーナー  
は1、ケーキ作り 2、粘土 3、屋内用の水遊び 4、  
文字ならべ、であった。先生は始めに五、六人の名  
前を呼んでケーキコーナーに行くように指示する。  
ケーキ作りには定員があるのだろう。呼ばれた子ど  
もはボールや粉の置かれた机に座る。呼ばれなかつ  
た子どもが自分もやりたいと言ったり、呼ばれた子  
が他の活動をしたと言ったりすることは無い。ス  
ムーズに事が運ぶ中に、子どもたちがまだ自分を  
出していない感じを私は受ける。他の子どもたちは、  
めいめいに興味を持った机に行く。

机ごとに先生が座って指導する。何しろ先生は四  
人もいるのだ。前述の四種類の活動の他に子どもた

ちは絵本を読んだり、レゴや積み木で自由に遊んでも良いが外で遊ぶ自由はない。安全確保のため、先生が外にいる時でない子どもは外で遊ぶ事はできない。私はどこに身を置くか考える。各活動における先生の指導を見るつもりならばどこかのコーナーに行けば良いのだが、私は、心理的に先生たちの邪魔をしたくないという気持ちと、先生のいない場面での子どもの遊びを知りたいという気持ちとで、レゴで遊んでいる五人の子どもの所に行く。私は子どもたちと直接関わりたいと思っている。五人は共通のイメージを持ってレゴで遊んでいる感じではない。思い思いにレゴを触っているというふうである。エディ（女児）がレゴの牛を動かして一人でままごとをしているので、私もレゴの牛を動かしてあかさつに行くとすぐにごっこ遊びが始まる。

私が、彼女の使っていた木製の小さな小屋の横にレゴで家を作ってプレゼントすると気に入ったよう



で、そこに住んで良いと言われる。二人で面白そうに遊んでいると、ルイ（男児）もレゴの家を作って欲しいと言うので同じ形の家を作って渡す。ルイも気に入った動物を中に入れていく。しばらくするとニール（男児）が来てルイの家を取ろうとする。ニールは身体も大きくて押しが強そうな子なのでルイをかばう気持ちもあって、私は急いで同じ家をニールにも作ってやる。三軒の同じ家が出来ると各自それぞれの家に動物を入れてごっこ遊びが始まる。

子ども同士で多くのやり取りがあるわけではない

が、以前より安定した空気がそこに流れ、三人が淡い仲間意識Ⅱ場の共有感、を持っていて感じるがする。三人が同じ物を持った事、私（大人）に「作って」と頼んだ事がなかった事、家を手に入れた事等がその安定に寄与していると思う。また、子どもが手にしていた動物は子ども自身であったと考える事も可能かも知れない。そして、その動物（自分）が家を作ってもらい、安全地帯を得た事に意味があったとも読み取れるだろう。子どもが自分から始めた遊びを少し大人が手伝う事で子どもの遊びが安定する事が多い。子どもの側から見れば、自分の選んだ遊びを支持された事で、自分が認められているという気持ちが生まれるのではないかと思う。私もその遊びによって彼らの個性、世界を知り、彼らを近しく感じだし、はつきりと名前を覚えた最初の子どもたちであった。遊びは十時半位まで続いた。

私はあえて先生たちの視野の中でこの活動をして

いたのだが、その間先生たちは一度もこちらを見に来なかった。ブルークラスの先生たちにとっては、用意した活動をそのコーナーに来た子どもに与える事が主な関心事なのだろうか、それとも安心してその場を私に任せてくれたのであろうか。もっとも、子ども達の楽しそうに遊ぶ空気は伝わっていたのだろう、K先生は、こんなに集中して長く遊んだ事はなかったと言ってレゴの家を壊さないで残していた。私は、自分の子どもとの関わりが先生たちに認められた気持ちにしてほっとした。先生たちはどう思われているか気にしている自分がある。実習生も、配属されたクラスの先生の暖かい視線で、ずい分と自由に動けるようになるのだろうなと実感する。

（ローハンプトン インステイテュート ロンドン  
客員研究員）